

報告番号	※ 第	号
------	-----	---

## 主 論 文 の 要 旨

論 文 題 目 現代日本語におけるカテゴリーを形成する派生語の意味分析

氏 名 大志民 彩加

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は現代日本語における「カテゴリーを形成する派生語」に着目し、そのカテゴリー化の様相について認知言語学的な観点から考察したものである。本論文において考察対象とする「カテゴリーを形成する派生語」とは、具体的には「アジア系（の留学生）」などの「系」、「演技派（女優）」などの「派」、「（僕は）直感型」などの「型（がた）」という3つの接尾辞を含んだ派生語である。これらの接尾辞は、派生語全体において多様な意味を有しており、さらに生産性の高い接尾辞であるといえる。例えば、前接する語の品詞は名詞に限らず、「混ぜる系（ラーメン）」「かわいい派（の私）」「（娘は）おっとり型」のように、動詞や形容詞、副詞などが前接するケースや、「世界が絶望の中でも一つの希望がある系（の映画）」などのように、文や句のレベルの形式が前接するケースも見られる。そのため、これらの接尾辞を用いることによって、これまでに認識されることのなかった新たなカテゴリーを示すことや、より適切に対象の属するカテゴリーを示すことが可能となっているといえる。以上を踏まえて、本論文では「系」「派」「型」を接尾辞として含む派生語の多義性や意味拡張の様相、そしてその背景にあるカテゴリー化のメカニズムを明らかにすることを目的とする。

以下は、本論文の構成である。まず、第1章では、上述のような本論文の目的と考察対象について確認した。

次に、第2章では、まず従来の語構成論について概観した。特に接尾辞や派生語がどのように規定されているのかを確認し、その上で、本論文で取り上げる「系」「派」「型」をそれぞれ接尾辞として位置づけた。

また、本論文の考察に関わる様々な言語単位や品詞の諸特徴について確認した。さらに、本論文の分析において重要な概念である、「カテゴリー（category）」および「カ

テゴリー化 (categorization)」について確認した。

次に、本論文が依拠する「構文理論 (Construction grammar)」について概観した。なお、本論文で考察対象とする「系」「派」「型」は、接尾辞という語構成要素の性質上、個々の様々な語基が接続することによって、具体的かつ多様な意味が形成されている。このことを踏まえて、本論文においても構文理論を援用することにより、実際の具体的な言語現象に基づいて、各接尾辞の意味や用法の動的な広がり過程を、より定着している事例から新奇な事例までも含めて、統一的に捉えることが可能になると主張する。

また、構文理論は様々な研究者によって研究されてきた文法理論であるが、特に多くの研究者によって概ね共有されている理論的特徴として、以下の3点を提示した。

- ① 構文は形式と意味が対となった記号であり、非要素還元的な意味を有する。
- ② 構文は典型事例から拡張事例までの幅を有するカテゴリーであり、ネットワーク構造を成している。
- ③ 構文理論は使用基盤モデルに依拠する。

第3章から第6章における分析は、この3点に基づいて行ったものである。

さらに、本論文において援用する認知言語学の諸概念(百科事典的意味、メタファー、シネクドキー、メトニミー、文法化)について確認した。

以上の理論的背景を踏まえて、第3章から第6章では具体的な個々の構文の意味を分析した。各章に共通して、はじめにそれぞれの構文における事例の形式的特徴(どのような品詞の要素が前接するのか、どのような形式によって用いられるのか)という点を確認した。後者に関しては、例えば[X系Y][X系のY][Yは/がX系だ]という3つの形式によって[X+系]構文が用いられることを確認し、それらの形式に共通する[X+系]という形式を構文として捉えて分析することを確認した。また、その多義性を検討する上で、上述の3つの形式におけるYの要素との関係を捉えることが重要であることを指摘した。([X+派]構文、[X+型]構文も同様に3つの形式が見られることを確認した)。

まず、第3章では、[X+系]構文を考察対象とした。具体的な意味分析では、まず個々の事例における意味の検討を踏まえてボトムアップ的に計9つの意味を抽出し、各意味の相互関係をメタファーによる意味拡張という観点から考察した。さらに、単純語として用いられる「系」の意味やその諸特徴を検討し、[X+系]構文の多義構造全体において、その特徴が漂白化しているといえることから、単純語「系」からの文法化の兆候が見られることを指摘した。そして、その文法化の過程の中で、[X+系]構文では周辺的な意味になるほど主体の価値判断や認識の程度が高まっており、より境界が明瞭なカテゴリーの意味から、境界が不明瞭なカテゴリーの意味へと拡張して

いることを指摘した。

次に、第4章では[X+派]構文を考察対象とした。具体的な意味分析では、まず個々の事例における意味の検討を踏まえてボトムアップ的に計4つの意味を抽出し、各意味の相互関係をメタファーによる意味拡張という観点から考察した。そして、単純語の「派」の意味や諸特徴を検討し、[X+派]構文の多義構造全体において、その特徴が漂白化しているといえることから、単純語「派」からの文法化の兆候が見られることを指摘した。そして、その文法化の過程の中で、[X+派]構文では周辺的な意味になるほど、より集団的・社会的なレベルのカテゴリーを表す意味から、より個人的なレベルのカテゴリーを表す意味へと拡張していること、そして、カテゴリーの境界がより明瞭な意味から、境界が不明瞭な意味へと拡張していることを指摘した。

次に、第5章では、[X+型]構文を考察対象とした。具体的な意味分析では、個々の事例の意味の検討を踏まえてボトムアップ的に計6つの意味を抽出し、各意味の相互関係をメタファーによる意味拡張という観点から考察した。そして、[X+型]構文の多義構造全体において、具体物に関する物理的属性としての意味から、人の営みや出来事に関する抽象的属性としての意味へと拡張している方向性があることを指摘した。そして、この大きな拡張の方向性と連動して、カテゴリーの境界が明瞭な意味から、境界が不明瞭な意味へと拡張していることを指摘した。さらには、単純語として用いられる「型(かた)」の意味やその諸特徴を検討し、その特徴が漂白化していることや、文法カテゴリーにおける脱範疇化が起きていることから、単純語としての「型」から接尾辞としての「型」へと文法化していることを指摘した。

次に、第6章では、句や文が前接する[X+系]構文、[X+派]構文、[X+型]構文の事例を取り上げた。このような用法は第3章から第5章において考察した派生語の用法からの拡張であるということ踏まえて、本論文では「拡張的用法」と位置づけた。そして、このような拡張的用法について、他の接尾辞について考察されている先行研究の内容も踏まえつつ、本論文の分析におけるどの意味からの拡張的用法であるのかを、実例に基づいて検討した。そして、第3章から第5章にかけて検討した各構文の意味の中でも、より周辺的な意味において拡張的用法の事例が見られることを指摘した。さらに、各接尾辞における文法化の傍証として、拡張的用法では、それぞれの接尾辞を含めない表現にしても、全体の意味や内容が大きく変わらないケースが見られること、各派生語が有する、カテゴリーとしての意味特徴が希薄化しているケースが見られることを指摘した。

最後に、第7章では、本論文のまとめと、今後の課題を提示した。